

## 看護師として関わる高次脳機能障害を持つ人への就労支援

兵庫県立リハビリテーション西播磨病院  
脳卒中リハビリテーション看護認定看護師  
阿曾 光子

高次脳機能障害は、脳血管障害や交通事故による外傷性脳損傷で生じる、言語や記憶、注意、感情のコントロールなどの機能が低下する障害である。決してまれな病態ではないが、外見からは分からないこの病態は、周囲の理解を得られにくく、自分自身にさえ自覚できないことが多いという特徴を持っており、「見えない障害」とも呼ばれる。近年では、厚生労働省の支援モデル事業が行われたり、医療機関においても研究が進み書籍なども多数出版されたり、メディアにて取り上げられることもある。しかし、社会の中での認知度はまだまだ低く、医療職である看護師においても十分な理解が得られていないのが現状である。

私は、4年前に関西福祉大学で脳卒中リハビリテーション看護認定看護師教育課程を修了し、現在、脳卒中に伴う麻痺や高次脳機能障害などを有する患者様が8割を占める回復期リハビリテーション病棟で働いている。病棟看護師として多くの高次脳機能障害を持つ方へ関わることに加え、家族会に参加させていただいたり、1年半前からは退院後の患者様をフォローできるよう、外来での看護相談を開始している。患者様やご家族からの声を聴く機会が増える中で、私が感じたことは、病棟でみていた高次脳機能障害はほんの一部であったということだった。日常生活を送ることはできるのに、就労や自動車運転再開に向けて取り組もうとされると、現実を突きつけられ途方に暮れる方たちを前に、看護師としてできることはあるのだろうかと思然とした。身の周りのことが自分でできれば、周囲からは悪意なく「これくらいですんで良かったね。」と言われる。誰にも理解してもらえない状況の中で、孤立感を覚えながら暮らしておられる患者様やご家族に対し、私は話を聞くことしかできなかった。しかし、そうやって話を聞き、患者様とご家族に寄り添うことが看護師としての重要な役割なのではないかと思うようになった。そのように思うきっかけをくださったのが、今回体験を語ってくださる患者様ご夫婦だった。少しずつではあるが、私の中に知識と経験が増え、その人に今必要な情報、支援は何だろうかと考えられるようになってきている。病院として、就労や自動車運転をフォローできる体制作りにも参加させてもらい、多職種と連携したり、どこに繋ぐ必要があるのかということを広い視野を持ってみていく力が必要だと感じている。そして、それと共に、病棟看護師が退院後の生活を想定し、その人らしい生き方を考え関わることができれば、患者様とご家族の戸惑いや不安を軽減していけるのではないだろうかという思いも持つようになった。

今回、高次脳機能障害にスポットを当て、「その人らしい生き方を支える」というテーマでシンポジウムを持たせてもらうことになった。高次脳機能障害について興味を持ってもらえる機会になると共に、退院後の患者様の体験を知ること、その人らしく生きることへの援助とは何かを皆さまと考える機会になればと願っている。